

学位論文要約

高等学校地理における ESD 授業の開発研究  
— ESD コンピテンシーの育成のための地理学習 —

広島大学大学院教育学研究科  
文化教育開発専攻 社会認識教育学分野

D136577 中村光則

2022

## I. 論文題目

高等学校地理における ESD 授業の開発研究  
— ESD コンピテンシーの育成のための地理学習 —

## II. 論文目次

### 序章 本研究の背景・目的・特質・方法

- 第一節 本研究の背景と目的
- 第二節 本研究の特質と意義
- 第三節 本研究の方法

### 第一章 ESD コンピテンシーを育成するための地理学習理論

- 第一節 地理 ESD 授業で育成するコンピテンシー
- 第二節 地理 ESD 授業の方法
- 第三節 地理 ESD 授業の内容

### 第二章 チェックシート型アプローチによる地理 ESD 授業の開発

- 第一節 チェックシート型アプローチ
- 第二節 単元「都市問題」の授業開発と実践
- 第三節 単元「地球環境問題」の授業開発と実践

### 第三章 視点整理型アプローチによる地理 ESD 授業の開発

- 第一節 視点整理型アプローチ
- 第二節 単元「資源・エネルギー問題」の授業開発と実践

### 第四章 読図を基盤とした地理学習による社会参画を目指した地理 ESD 授業の開発

- 第一節 地理学習に ESD の視点を取り入れた授業
- 第二節 単元「地域の防災—きみは自然災害から身を守れるか—」の授業開発と実践

### 第五章 システム思考で地域的諸課題を考察させる地理 ESD 授業の開発

- 第一節 システム思考で地域的諸課題を考察させる地理 ESD 授業
- 第二節 防災単元の開発と実践
- 第三節 防犯単元の開発と実践
- 第四節 システム思考で地域的諸課題を考察させる地理 ESD 授業の成果と課題
- 第五節 システム思考で考察させる地理 ESD 授業モデル

## 終章 ESD における地理学習の貢献と今後の展望

第一節 ESD コンピテンシーの育成による地理学習の改善と本研究の成果

第二節 今後の展望と課題

### III. 論文要旨

#### 序章 本研究の背景・目的・特質・方法

「ESD の最大の魅力は『持続可能性』という考えそのものにある」(唐木, 2017, p. 195) と指摘され, 「ESD 最大の特徴は SD あるいは持続可能性という概念にあり, 教科学習においては SD の原則, 価値観を踏まえた ESD の授業づくりが求められる」(阪上, 2018 a, p. 179) と指摘される一方で, SD について「この概念の難解さ・曖昧さが ESD の普及を妨げている部分が多い」(桑原, 2011) と指摘され, 社会系の授業における ESD の実践が少ない背景については, ①ESD を学習する意義を実感できない。②ESD の訳である「持続発展教育」「持続可能な開発のための教育」「持続可能な社会」といった言葉の意味が理解しにくい。③既存の授業と ESD の授業との違いがわからない。(桑原, 2011) などが指摘されている。そもそも, ESD は日本にどのように導入され, 位置付いてきたのか。

ESD の導入の背景を振り返ると, 「国連持続可能な開発のための教育の 10 年」関係省庁連絡会議 (2006) は, ESD の目標について次のように示している。「ESD の目標は, すべての人が質の高い教育の恩恵を享受し, また, 持続可能な開発のために求められる原則, 価値観及び行動が, あらゆる教育や学びの場に取り込まれ, 環境, 経済, 社会の面において持続可能な将来が実現できるような行動の変革をもたらすこと」(p. 3) とし, 国連持続可能な開発のための教育の 10 年の最終年までの目標としては, 「ESD の積極的な推進により, 一人ひとりが, 世界の状況や将来の世代と, 現在の社会や自分との関係を見つめ, 自らが生きる社会を持続可能な社会とすべく, その社会づくりに参画するようになること」(p. 4), 「教育機関, NPO, 事業者, 行政等が, それぞれの活動に, 持続可能な社会づくりのための行動を行うこと」(p. 4) とし, さらに, 「各地域において様々な主体が連携しつつ, それぞれの地域の文化, 産業, 自然, 歴史等を踏まえた, 持続可能な地域づくりを行うこと」(p. 4) とし, 「これらの取組を通じて, 日本社会が持続可能な社会に近づき, また各主体が, 世界の中の一員として, 地域, 国, 国際レベルで行動し, 必要な役割を担うようになること」(p. 4) を目指すとしている。

しかしながら, これら個々の目標については, ESD の国際及び国内実施計画が策定される前から, 持続可能な開発のための教育と同様の地球的課題の解決を目指した教育は実施されてきた。阿部 (2009) は, こうした課題解決に向けた教育を総合的に取り組んだものが ESD であるとし, 阿部 (2006) は, その背景についてまとめている。また, 阪上 (2018

b)は1972年にストックホルムで開催された、いわゆる「国連人間環境会議」に端を発し、経済的・社会的発展への関心や自然資源の管理とバランスへの理解が大きかったと指摘している。

ESDの定義は、阿部(2010)によれば、40を超える概念が示されているが、国際実施計画では、1987年にブルントラント委員会(環境と開発に関する世界委員会)が定義した「持続可能な開発とは、将来世代がそのニーズを満たす能力を損なうことなく、現在の世代のニーズを満たす開発」(p.15)を用い、この持続可能な開発の達成に向けて国際実施計画では、「教育について疑問を持ち、再考し、修正し、環境、経済の各領域における持続可能性に関連するより多くの原則、知識、技能、洞察力、価値観を教育に取り入れることが、私たちの現在そして社会にとって必要である」(佐藤・阿部 2006, p.191)と示されている。

これらを踏まえ、阪上(2018b)は、ESDの学習過程で求められる要素を、国際実施計画が提示する①学際性、総合性、②価値による牽引、③代替案と問題解決、④多様な方法、⑤参加型の意味決定、⑥地域との関連、の6点とし、「多岐にわたる課題について、さまざまな専門的視点を用いて、多様な学習方法によって多面的・批判的に分析したり解決案を提案したりし、学習者に意思決定させたりするとともに、価値観などに変化をもたらすことを想定したものとなる。」(阪上2018b, p.2)と指摘している。

以上を踏まえ、本研究の目的は、ESDの理念を授業レベルで具体化することで高等学校における地理歴史科地理の授業改善を図ることにある。そのために、高等学校地理歴史科地理にESDの視点を取り入れた授業を開発する。そして、その開発した授業を実践することによって、その有効性を明らかにする。地理歴史科地理の授業にESDの視点を取り入れることによって授業を改善することが、持続可能な社会の実現に貢献できると考えた結果、ESDを地理歴史科地理の授業の開発及び実践において具体化することには意義があると判断したからである。

本研究の特質と意義は、次の3点にまとめることができる。

第一に、高等学校地理におけるESD授業において、どのようなコンピテンシー(資質・能力)を育成することができるかを明らかにしようとする点である。つまり、高等学校地理におけるESD授業を、育成するコンピテンシーを基にして開発する点に本研究の特質と意義があると考え。本研究では、高等学校地理におけるESD授業において育成するコンピテンシーを明らかにすることとする。

第二に、高等学校地理におけるESD授業において育成するコンピテンシーを、どのような方法で育成することができるのかを明らかにしようとする点である。つまり、ESDで求められるコンピテンシーを育成するための方法を明らかにしようとする点において、本研究における特質と意義があると考え。本研究では、ESDの視点を取り入れた地理教育の特徴を明らかにし、高等学校地理におけるESD授業の方法について明らかにすることとする。

第三に、高等学校地理におけるESD授業において育成するコンピテンシーとそれを育成

する方法を踏まえ、2022年度から導入される地理歴史科の新科目「地理総合」を想定して開発し、実践した授業を基に、地理ESD授業モデル「防災地域づくり」及び「防犯地域づくり」を開発することとする。これらの地理ESD授業モデルの開発は、ESDコンピテンシーの育成のための地理学習による授業改善を広く推進する上で意義があると考えられる。

本研究の目的を達成するために、以下の手順、方法で行った。

第一章においては、ESDの国際実施計画、国際地理学連合地理教育委員会のルツェルン宣言の分析及び国立教育政策研究所（2010）が整理した「ESDの視点に立った学習指導で重視する能力・態度」などに関する先行研究を参考として、高等学校地理におけるESD授業で育成するコンピテンシーについて明らかにし、このコンピテンシーを基に、以下の各章において開発した授業を実践することとした。

第二章では、チェックシート型アプローチによる「地球環境問題」を扱った授業、第三章では、視点整理型アプローチによる「資源・エネルギー問題」を扱った授業を開発し、実践することとした。これらの授業実践によって、従来の地理の授業にESDコンピテンシーを育成する場面を追加することによって授業改善を図る方法を明らかにすることとした。

第四章では、生徒にとって身近な地域の地形図の読図を基盤とした「身近な地域の防災」を取り上げた授業、第五章では、特にシステム思考に重点を置き、地域的諸課題を考察させる「防災地域づくり」及び「防犯地域づくり」を扱った授業を開発し、実践することとした。これらの授業実践によって、地理的知識や技能を活用することでESDコンピテンシーを育成する方法を明らかにすることとした。

最後に終章において、ESDにおける地理学習の貢献とその後の展望について明らかにすることとした。

## 第一章 ESDコンピテンシーを育成するための地理学習理論

第一章では、ESDの国際実施計画、国際地理学連合地理教育委員会のルツェルン宣言の分析及び国立教育政策研究所（2010）が整理した「ESDの視点に立った学習指導で重視する能力・態度」などの先行研究を参考として、高等学校地理におけるESD授業で育成するコンピテンシーについて明らかにすることを目的とした。また、「ESDの視点に立った学習指導で重視する能力・態度」の4つの能力（①批判的に考える力、②未来像を予測して計画を立てる力、③多面的、総合的に考える力、④コミュニケーションを行う力）と3つの態度（⑤他者と協力する態度、⑥つながりを尊重する態度、⑦進んで参加する態度）を育成することによって、それらの能力・態度より上位の「持続可能な社会づくりに参画する能力・態度」を育成することができることを明らかにし、これらの能力・態度を「ESDコンピテンシー」と呼ぶこととした。

ESDコンピテンシーに関して、中山（2011）は、持続可能な開発に関する価値観尊重の重要性を指摘している。また、ドイツで持続可能性の原理が国家目標として基本法（憲法）に盛り込まれたことを受けて策定されたトランスファー21（2012）では、「先を見越して考

え行動する」力、日本ユネスコ国内委員会（2021）では、「未来像を予測して計画を立てる力」などの予測能力等の重要性が示された。本研究では、このような能力が持続可能な社会づくりに参画する能力・態度につながることを明らかにした。

地理 ESD 授業で育成するコンピテンシーに関しては、由井・阪上（2012）は、ドイツ地理学会が 2006 年に発表した「地理教育スタンダード」と、2007 年に国際地理学連合地理教育委員会ルツェルン大会（スイス）で提案された「持続可能な開発のための地理教育に関するルツェルン宣言」が設定する能力の共通点として「空間の形成のために認識し判断し取り組む能力」を指摘した上で、この能力を育成する教育を実践することで、同時に ESD も実践できると結論付けている。また、池下（2020）は、ESD の授業に関して「環境保全、経済的妥当性、公正な社会」の三領域に、「批判的思考、システム思考、未来を予測する力、参加・協働型意思決定」を位置付けた授業を行うことが ESD 的な授業を行うことになる」と指摘し、由井（2006）は、ESD は、持続可能な未来の実現に向け、人々の意識の変容を目指す教育であると指摘している。また、森分（1984）は、未来を予測するには、事実的、概念的知識を踏まえることが必要であると指摘している。

以上のことから第一章では、地理 ESD 授業で育成するコンピテンシーを「未来像を予測して計画を立てる力」に焦点化した授業開発の有効性を明らかにした。

## 第二章 チェックシート型アプローチによる地理 ESD 授業の開発

第二章では、「チェックシート型アプローチ」を用いることによって、地理学習の改善を図ることを目的とした。「チェックシート型アプローチ」とは、縦軸に ESD で求められる内容（概念）群を、横軸に ESD で求められる方法（技能）群を示したマトリックス図を用いて従来行ってきた授業を分析し、従来行ってきた授業に ESD で求められる内容（概念）や方法（技能）を追加することによって、「より ESD 的」な授業にすることで授業改善を図るものである。第二章では、筆者が従来行ってきた高等学校地理の単元「地球環境問題」の授業計画を分析し、「より ESD 的」な授業に改善し実践した。具体的には、筆者が従来行ってきた単元「地球環境問題」（地理 B）の授業をチェックシートを用いて分析することによって「より ESD 的に」授業を改善するために、主に「経済的社会的公正」の内容（概念）について論理的に構成した従来の授業に、「将来への責任」、「人間を取り巻く自然との共存」及び「行動のスキル」の内容（概念）を追加した計画に修正して授業を行うことによって、ESD コンピテンシーを育成する授業に改善できることを明らかにした。

## 第三章 視点整理型アプローチによる地理 ESD 授業の開発

第三章では、「視点整理型アプローチ」を用いることによって、地理学習の改善を図ることを目的とした。「視点整理型アプローチ」とは、各教科等の中で ESD の視点に立った学習を展開していくために、ESD の目標を必要最小限に単純化して表し、実践を行う教科・分野・単元等の目標に、ESD の目標を付加することを通して、ESD の視点に立った学習指導を進め

ていこうとするものである。第三章では、高等学校地理の単元「資源・エネルギー問題」（地理A）の授業計画に、必要最小限に単純化したESDの目標を付加することによって授業改善を図り、実践した。具体的には、単元「資源・エネルギー問題」（地理A）の目標に、「問題の解決に向けた行動を、他者と協力して実践しようとする。」（他者と協力する態度）、「問題を多面的に考察し、将来のことを予測するとともに、自分にできる行動を判断する」（未来像を予測して計画を立てる力）及び「自分の考えの根拠を明確にするとともに、他者の意見も聞きながら、再度自分の考えを吟味する。」（他者と協力する態度）を付加することによって、ESDコンピテンシーを育成する授業に改善できることを明らかにした。

#### **第四章 読図を基盤とした地理学習による社会参画を目指した地理ESD授業の開発**

第四章では、国立教育政策研究所（2012）においてESDで求められる内容（概念）群に「危機管理・危険回避」を新たに追加し、地図上の情報を読み取り自然災害から身を守る防災について考察するESD授業を開発・実践することによって授業改善を図ることを目的とした。「危機管理・危険回避」をESDで求められる内容（概念）群に追加することとした理由は、持続可能な社会の形成のためには、人間の生命の安全が最優先であることから、その形成者の育成において、社会生活における「危機管理・危険回避」のための知識・技能や、能力・態度の育成が重要であると考えられるためである。

具体的には、「身近な地域において具体的な自然災害を想定し、地形図やハザードマップを読み取る地理的知識・技能を活用することによって、避難場所や避難時の行動を考察させる学習を行えば、持続可能な社会づくりに参画する能力・態度の基礎となる、未来像を予測して計画を立てる力及びつながりを尊重する態度を育成することができる。」という仮説を立て、授業実践することにより、ESDコンピテンシーを育成する授業に改善できることを明らかにした。

#### **第五章 システム思考で地域的諸課題を考察させる地理ESD授業の開発**

第五章では、地域的諸課題のうち、地域での危険回避を扱う単元として「防災地域づくり」と「防犯地域づくり」の地理ESD授業を開発し、実践した。これらをテーマとした授業は、人間活動と自然環境や、人間活動と生活環境とをそれぞれ組み合わせて考察する「システムティック」の視点と、社会や生活全体を広く俯瞰して考察する「システムミック」の視点から考察する「システム思考」の育成に有効であることを明らかにするために、ESDの視点を取り入れた授業の開発の中で、特に「システム思考」に着目し、その有効性について検証していくこととした。具体的には、単元「防災地域づくり」については、土石流の危険溪流に対する防災対策において、縦軸を行政及び個人、横軸をハード面及びソフト面とするマトリックスで整理し、「システム思考」で考察させる授業を、単元「防犯地域づくり」については、広島県警察がGISで作成した「犯罪発生マップ」から犯罪の発生場所の分布を捉えさせ、それらの場所の景観をフィールドワークやストリートビューで観察させ、

防犯環境設計 (CPTED) の理論を用いて分析させて、「システム思考」で考察させる授業を、それぞれ開発し実践することにより、ESD コンピテンシーを育成する授業に改善できることを明らかにした。

## 終章 ESD における地理学習の貢献と今後の展望

本研究では、従来の地理学習を ESD コンピテンシーを育成する地理学習に変化させることによって授業改善を図ることを目的として授業開発と実践を試みた。

第一章における成果は、高等学校地理における ESD 授業によって育成するコンピテンシーを、「未来像を予測して計画を立てる力」に焦点化した点である。ESD で育成すべき 7 つの能力・態度を 1 つに焦点化することによって、分かりやすく、取り組みやすくなったと考える。

第二章における成果は、従来の地理の授業に、ESD の内容や方法を追加するというチェックシート型アプローチの方法をとることによって、誰でも分かりやすく「より ESD 的」な地理の授業に改善できる方法を示した点である。コンテンツを基にした授業構成となるため、育成すべきコンピテンシーを基に授業構成する ESD の授業とは異なり、授業で扱う知識や概念によって ESD 的な授業に改善するため、ESD の本質からずれる可能性があるとも考えられるが、ESD の導入段階での普及を図る方法としては有効であると考えられる。

第三章における成果は、「視点整理型アプローチ」の方法をとることによって、ESD で育成すべきコンピテンシーとして能力・態度を整理して授業を構成することにより、ESD で育成すべき能力・態度に焦点化した授業づくりの方法を提案できた点である。

第四章における成果は、ESD で育成する能力・態度を、「防災地域づくり」をテーマとし、地理的技能を活用することによって育成できることと、読図が「未来像を予測して計画を立てる力」の育成につながり、「未来像を予測して計画を立てる力」の育成が社会参画につながることを実践によって明らかにした点である。

第五章における成果は、地理学習においてシステム思考に焦点化した学習を行うことが「未来像を予測して計画を立てる力」の育成に有効であることを実践によって明らかにした点である。

各章の分析結果から、本研究における成果を 3 点示す。

第一に、高等学校地理における ESD 授業において、どのようなコンピテンシー（資質・能力）を育成することができるかを明らかにした点である。地形図や主題図等から空間的に読み取る読図などの地理的技能と、地理的事象の全体像を把握するシステム思考の 2 つの能力を組み合わせることで諸課題を考察することによって、未来像を予測し、計画を立て、その計画に沿って行動できる力を育成できることが明らかとなった。

第二に、高等学校の地理の授業において ESD コンピテンシーを育成する方法を明らかにした点である。従来も地理で行ってきた読図等の地理的技能とシステム思考を働かせる地理学習が、ESD で求められる力の育成に有効であることが地理 ESD 授業の開発及び実



践によって明らかとなった。

第三に、高等学校地理における ESD 授業において育成するコンピテンシーと方法を踏まえ、2022 年度から高等学校へ導入される地理歴史科の新科目「地理総合」を想定して実践した授業を基に一般化した地理 ESD 授業モデル：地理総合「防災地域づくり」及び「防犯地域づくり」を開発した点である。これらの地理 ESD 授業モデルの開発によって、ESD コンピテンシーの育成のための地理学習による授業改善を広く推進できると考える。

今後の展望としては、ESD と OECD Education 2030 や SDGs とのつながりが挙げられる。OECD では、2015 年から Education 2030 プロジェクトで、2030 年という近未来において子供達に求められるコンピテンシーとして、「私たちの社会を変革し、私たちの未来を作り上げていくためのコンピテンシー」（文部科学省、2018 a, p. 97）を検討している。このプロジェクトが示すコンピテンシーの概念は、「単なる知識及びスキルの獲得以上のものであり、複雑な要求に応えるために知識やスキル、態度及び価値を動員することを含む。」（文部科学省、2018 a, p. 96）とされる。また Education 2030 プロジェクトは、急速に変化する世界における環境、経済、社会の 3 つに関する課題に対する新たな解決策の必要性を示し、パートナーシップを通じて、人々の利益、地球、平和の持続可能性を確保することによって、国連の 2030 年持続可能な開発目標（SDGs）にも貢献するとされている。このことから、OECD の Education 2030 プロジェクトと ESD や SDGs との親和性を読み取ることができる。ESD コンピテンシーを育成することが、SDGs の 17 の目標の実現につながることから、ESD コンピテンシーを育成する地理学習を行うことによって、社会や地球のウェルビーイングの獲得に向けて地理学習が貢献できると考えられる。また、2022 年度から高等学校へ導入される地理歴史科の新科目「地理総合」は、持続可能な社会づくりを目指して設定された科目である。特に国際関係や国内、地域における諸課題の解決策を提案する地理学習を開発・実践することによって、現状認識から未来を考察し、持続可能な社会へ向けて行動できるコンピテンシーの育成に貢献できる科目であると考えられる。

今後の課題としては、本研究で行ったような ESD コンピテンシーを育成する地理学習において重要である、参加型の授業やフィールドワークを実施する授業を、いかにして一般的にどの高等学校においても行えるようにできるかという点が挙げられる。

さらに、未来社会を予測する学習において、生徒個々の学習評価をどのように精緻化していくかが今後の課題であると捉える。

#### IV. 参考文献

- 1) 秋本弘章 (2001) : 作業学習による都市の内部構造の指導—「地理的見方・考え方」の指導例として—。新地理, 49 (2), pp. 31-39.
- 2) 阿部治 (2006) : わが国における国連持続可能な開発のための教育の 10 年の取組と課

- 題—科学教育への期待をこめて—. 年会論文集, 30, pp. 355-358.
- 3) 阿部治 (2009): 「持続可能な開発のための教育」(ESD) の現状と課題. 環境教育, 19(2), pp. 21-30.
  - 4) 阿部治 (2010): ESD (持続可能な開発のための教育) とは何か. 生方秀紀・神田房行・大森亨編著『ESDをつくる』ミネルヴァ書房, pp. 1-27.
  - 5) ESD-J (2006): 『ESDがわかる!』.
  - 6) 池下誠 (2020): ESDの視点を入れた社会科の授業開発に関する研究—「社会的な見方・考え方」の考察を通して—. 広島大学大学院人間社会科学研究科紀要「教育学研究」, 1, pp. 391-400
  - 7) 泉貴久 (2019): システム思考に基づいた高等学校地理における地球的諸課題の解決と社会参加を目指した授業実践—単元「チョコレートから世界が見える」を通して—. 地理科学, 74 (3), pp. 180-191.
  - 8) 伊藤智章 (2004): 高等学校における GIS を用いた「地形図の読み方」の学習—「知識獲得型」の学習における教育効果の検証—. 新地理, 52 (2), pp. 34-43.
  - 9) 伊藤智章 (2005): 「生徒に提示する GIS 教材」による地形図の読図支援—「大学入試問題演習」での利用事例—. 新地理, 52 (4), pp. 32-43.
  - 10) 伊藤直之 (1998): 資源・環境管理のための地理教育—Longman Geography の場合—. 教育学研究紀要, 44 (2), pp. 149-154.
  - 11) 梅村松秀 (2019): 「持続可能な開発のための地理教育に関するルツェルン宣言」の再読—「人間—地球」エコシステムが提起すること—. 地理科学, 74 (3), pp. 116-126.
  - 12) 大杉昭英 (2017): 『平成 28 年版 中央教育審議会答申全文と読み解きと解説』. 明治図書, 455p. (p. 37)
  - 13) 大西宏治 (2008): 持続可能な開発のための地理教育ルツェルン宣言, 新地理, 55 (3), pp. 33-38.
  - 14) 大西宏治 (2012): 地図を活用した防災教育の有効性. 新地理, 60 (1), pp. 30-36.
  - 15) 岡本弥彦 (2014): ESD の学習指導過程を構想し展開するために必要な枠組みとその活用. 日本教科教育学会誌, 36 (4), pp. 103-106.
  - 16) 河合豊明 (2012): 推奨授業例 地理 A 地域に適した災害対策と持続可能な地域社会づくり. 中山修一・和田文雄・湯浅清治編: 『持続可能な社会をめざす地理 ESD 授業ガイド』啓文社, pp. 52-53.
  - 17) 河合豊明 (2019): システム思考で地球的課題を考察する—オゾンホールを題材とした地理授業実践—. 地理科学, pp. 171-179.
  - 18) 壁谷雅子 (2013): 学校を拠点としたセーフコミュニティ活動—神奈川県厚木市立清水小学校通学区における事例—, 新地理, 61 (2), pp. 29-41.
  - 19) 唐木清志 (2017): 公民教育と ESD. 井田仁康編『教科教育における ESD の実践と課題—地理・歴史・公民・社会科—』古今書院, pp. 184-197.

- 20) 川瀬久美子 (2018) : 高校地理における ESD のためのエネルギー問題の教材化. 愛媛大学教育学部紀要, 63, pp. 255-267.
- 21) 草原和博 (2006) : 地理教育の社会化—わが国の地理教育変革論の体系と課題—. 社会系教科教育学研究, 18, pp. 1-10.
- 22) 草原和博 (2007) : 地理教育の公民教育化—地域を単位にした総合的な社会研究—. 社会科研究, 66, pp. 11-20.
- 23) 草原和博 (2008) : 地理教育改革のオルタナティブ—教科構造の原理的考察を踏まえて—. 社会系教科教育学研究, 20, pp. 21-30.
- 24) 國原幸一朗 (2015) : 防災教育における高等学校地理の役割—意思決定を促す地理情報の活用—. 社会科教育研究, 126, pp. 1-13.
- 25) 桑原敏典 (2011) : 持続可能な社会の形成を目指した社会科教材開発の原理と方法. 社会科教育研究, 113, pp. 72-83.
- 26) 小河泰貴 (2019) : システム思考を用いた地域的諸課題の考察—地域調査の実践を通して—. 地理科学, 74 (3), pp. 148-157.
- 27) 国立教育政策研究所 (2010) : 学校における持続可能な発展のための教育 (ESD) に関する研究 [中間報告書]. 211p
- 28) 国立教育政策研究所 (2012) : 学校における持続可能な発展のための教育 (ESD) に関する研究 [最終報告書]. 354p
- 29) 「国連持続可能な開発のための教育の 10 年」関係省庁連絡会議 (2006) : わが国における「国連持続可能な開発のための教育の 10 年」実施計画.
- 30) 小谷恵津子 (2017) : スケール認識の形成を視点とした小学校地図学習の改善—縮尺指導の授業構成と学習内容の検討を通して—. 新地理, 65 (2), pp. 1-18.
- 31) 児玉修 (1989) : 地理学習における「環境」概念の批判的再構成—序説—. 社会認識教育学会編『社会教育の理論』. ぎょうせい, pp. 373-385.
- 32) 今野良祐 (2020) : zoom を用いたオンライン授業の取り組み. 新地理, 68 (2), pp. 17-20.
- 33) 阪上弘彬 (2015) : 地理教育における持続可能な開発のための教育 (ESD) の動向. 広島大学大学院教育学研究科紀要, 第二部 64, pp. 17-26.
- 34) 阪上弘彬 (2018 a) : 地理学習に ESD (持続可能な開発のための教育) を組み込むための方法—Textbooks for Sustainable Development:A Guide to Embedding—. 兵庫教育大学学校教育学研究, 31, pp. 179-187.
- 35) 阪上弘彬 (2018 b) : 『ドイツ地理教育改革と ESD の展望』古今書院.
- 36) 阪上弘彬 (2019) : 地理学習におけるシステムの観点—新学習指導要領等の検討から—. 地理科学, 74 (3), pp. 107-115.
- 37) 佐藤真久・阿部治監訳 (2006) : 国連持続可能な開発のための教育の 10 年 (2005~2014 年) 国際実施計画. ESD-J2005 活動報告書, pp. 173-193. UNESCO(2005) : United Nations

Decade of Education for Sustainable Development(2005-2014) International Implementation Scheme. UNESCO.

- 38) 佐藤崇徳 (2017) : デジタル地図で考える防災. 新地理, 65 (2), pp.77-79.
- 39) 志村喬 (2008) : イギリス地理教育におけるシティズンシップの位置づけと実践. 中等社会科教育研究, 27, pp.1-12.
- 40) 志村喬 (2017) : 教科教育としてのESD授業開発の手法—社会科授業を例に一. 井田仁康編『教科教育におけるESDの実践と課題—地理・歴史・公民・社会科—』. 古今書院, pp.10-25.
- 41) 諏訪哲郎 (2015) : 佐藤学ほか編著, 『持続可能性の教育—新たなビジョンへ—』, 教育出版, pp.58-88.
- 42) 高田準一郎 (2012) : 奨励授業例 地理A 津波で浸水しなかった歴史街道. 中山修一・和田文雄・湯浅清治編: 『持続可能な社会をめざす地理ESD授業ガイド』啓文社, pp.55-56.
- 43) 竹内裕一 (2012) : 地域における社会参加と地理教育. E-journal GEO, 7 (1), pp.65-73.
- 44) 竹内裕一 (2014) : 次世代を担う人材育成を射程に入れた地域問題学習—地域に生きる主体形成学習の可能性—. 社会科教育研究, 122, pp.62-73.
- 45) 武市伸幸 (2003) : 高等学校の自然地理教育における地すべりの教材化の試み. 新地理, 50 (4), pp.41-53/
- 46) 田部俊充 (1995) : アメリカ社会科における地理的技能の考察. 社会科教育研究, 73, pp.40-49.
- 47) トランスファー21 編著, 由井義通・ト部匡司監訳, 高雄綾子・岩村拓哉・川田 力・小西美紀訳 (2012) : 『ESD コンピテンシー—学校の質的向上と形成能力の育成のための指導指針—』明石書店.
- 48) 鳥海公 (1990) : 野外観察力, 写真読解力及び地形図の読図力の発達と育成. 新地理, 37 (4), pp.40-47.
- 49) 永田成史 (2008) : 高等学校地理における地球環境問題学習の開発—社会参加を視点とした授業設計—. 社会科研究, 68, pp.31-40.
- 50) 永田成史 (2011) : 系統地理を基盤とした市民性を育成する地理教育の授業構成—オーストラリアVIC州中等地理を事例として—. 社会科研究, 75, pp.41-50.
- 51) 永田成史 (2015 a) : 電気の持続的利用を考える小学校における地理ESD授業の開発—社会的論議問題を外国に伝える活動を通して—. 地理教育研究, 17, pp.1-10
- 52) 永田成史 (2015 b) : 防災意識を高める景観の視点を導入した地理教育の授業構成—オーストラリアのナショナルカリキュラムに対応した中等地理単元を手がかりに一. 社会科教育研究, 126, pp.14-26.
- 53) 永田成史 (2017) : これから考えたい地理ESD授業とは—持続可能社会の視点からのア

プローチ.『社会科教育』, 明治図書.

- 54) 永田成史 (2020) : 高等学校地理歴史科における「総合」科目の学習指導・評価—実際に授業を単元で構想してみよう—.『中学校社会科教育・高等学校地理歴史科教育』学術図書出版.
- 55) 永田成史 (2021 a) : 地域活性化に向けて地域の魅力を考える地理 ESD 授業—観光資源を他地域に伝える活動を導入して—.『持続可能な社会に向けての教育カリキュラム—地理歴史科・公民科・社会科・理科・融合—』古今書院.
- 56) 永田成史 (2021 b) : 地域活性化に向けて観光資源の活用を考える地理 ESD 授業. 日本地理教育学会第 71 回大会一般発表.
- 57) 永田暢之・岡崎誠司 (2017) : 主体的価値観形成を目指す「ESD 型社会科」の単元開発—環境経済学の成果を生かした小学校地域学習の授業改善—. 富山大学人間発達科学研究実践総合センター紀要 教育実践研究, 12, pp. 77-89.
- 58) 永田成史・金 玗辰・泉 貴久・福井朋美・藤澤誉文 (2017) : 世界の地理教師たちとつくる新しい地理教材 4 エネルギーをテーマとした地理 ESD 授業. 地理, 62(9), pp. 100-105
- 59) 中村光則 (2011) : 高等学校地理 A における ESD 授業の実践—チェックシート型と視点整理型の 2 つのアプローチによる試み—. 地理科学, 66 (3), pp. 141-151.
- 60) 中村光則 (2016) : 高校地理における ESD の視点を取り入れた防災単元の開発と授業実践—読図を基盤とした地理学習による社会参画をめざして—. 社会科教育研究, 128, pp. 158-170.
- 61) 中村光則 (2019) : システム思考で地域的諸課題を考察する高校地理学習—地域での危険回避を扱う単元「防災」と「防犯」の開発と実践—. 地理科学, 74 (3), pp. 158-170.
- 62) 中山修一 (2011) : 地理 ESD 教材開発の目標, 内容, 方法. 中山修一・和田文雄・湯浅清治編 : 『持続可能な社会と地理教育実践』. 古今書院, pp. 10-15.
- 63) 中山修一・和田文雄・湯浅清治 (2012) : 『持続可能な社会をめざす地理 ESD 授業ガイド』 啓文社.
- 64) 二井正浩 (2011) : チェックシート・アプローチによる「より ESD 的な」社会科実践への改善—小学校 5 学年「日本の農業の担い手」を例にして—. 社会科研究, 75, pp. 71-80.
- 65) 日本ユネスコ国内委員会 (2021) : 持続可能な開発のための教育 (ESD) 推進の手引.
- 66) 濱野清 (2011) : 学習指導要領における ESD の位置付け. 地理科学, 66 (3), pp. 116-123
- 67) 藤澤誉文 (2019) : 国際バカロレアでシステム思考を育成する—地理教育の実践に向けて—. 地理科学, 74 (3), pp. 138-147.
- 68) 堀江克浩 (2015) : 防災教育における「地理 A」と「防災の学び」の取り組み. 地理教育. 44, pp. 28-34.

- 69) 松岡靖 (2018) : 持続可能な社会の再構築を図る社会科 ESD 授業の開発—小学校第 5 学年単元「青空を取りもどした北九州市」の場合—. 社会系教科教育学研究, 30,
- 70) 村中亮夫・谷端 郷・飯塚広志・中谷友樹 (2014) : 高校地理での学習内容を活かした防災教育プログラムの開発と実践—身近な地域の水害リスクを事例として—. 地理科学, 69 (4), pp. 195-213.
- 71) 村中亮夫・浅妻 裕・谷端 郷・米島万有子・高橋伸幸 (2019) : 自助・共助のための防災マップ作成ワークショップの実践と課題—北海道石狩市における水害・土砂災害を事例として—. 地理科学, 74 (2), pp. 70-89.
- 72) 森分孝治 (1984) : 『現代社会科授業理論』, 明治図書,
- 73) 文部科学省 (2018 a) : OECD Education 2030 プロジェクトについて 教育とスキルの未来 : Education 2030 【仮訳 (案)】. 中等教育資料, pp. 92-100.
- 74) 文部科学省 (2018 b) : 『高等学校学習指導要領 (平成 30 年告示) 解説地理歴史編』. 東洋館出版社.
- 75) 山口幸男・西木敏夫・八田二三一・小林正人・泉貴久編 (2008) : 『地理教育カリキュラムの創造』. 古今書院.
- 76) 山崎憲治 (2012) : 小・中・高・大・社会教育を貫く防災学習を求めて. 新地理, 60 (1), pp. 54-56.
- 77) 山本隆太 (2015) : 地理学習におけるシステム思考を用いたコンピテンシー開発論に関する一考察—学問研究と教科教育の架橋—. 早稲田大学本庄高等学院研究紀要 教育と研究, 34, pp. 89-106.
- 78) 山本隆太 (2016) : ドイツ地理科カリキュラムにおける総合性とシステムの視座. 静岡大学教育研究, 12, pp. 1-10.
- 79) 山本隆太 (2019) : スイス・ドイツの「地理システムコンピテンシー」(GeoSysKo) の特性—実証試験問題の分析—. 地理科学, 74 (3), pp. 127-137.
- 80) 由井義通 (2016) : IYGU (国際地球理解年) と ESD との連携, 新地理, 64 (3), pp. 72-81.
- 81) 由井義通・阪上弘彬 (2012) : ESD の観点からみたドイツ地理教育スタンダードの分析. 学校教育実践学研究, 18, pp. 75-86.
- 82) 吉田和浩 (2021) : SDGs ターゲット 4.7 と ESD. 『学校教育』, 12 月号, pp. 62-63.
- 83) 吉田剛 (2003) : 地理的技能を育成する高校地理授業の設計. 新地理, 50 (4), pp. 1-12.
- 84) 吉水裕也 (2013a) : 防災ガバナンスのアクター育成としての地理歴史科地理コミュニティ問題学習. 社会系教科教育学研究, 25, pp. 1-10.
- 85) 吉水裕也 (2013b) : 中等地理教育でリスク社会をどのように扱うのか—身近な地域の防犯環境設計を事例として—. 社会科教育研究, 119, pp. 58-67.